伊勢物語

　　芥川

　昔、男がいた。女で手に入れることができそうにもなかった人を、何年もの間求婚し続けていたが、（その女を）やっとのことで盗み出して、たいへん暗い夜に（逃げて）来た。芥川という川（のほとり）を（女を）連れて行ったところ、草の上におりていた露について、（女が）「あれは何ですか。」と男に尋ねた。道のりは遠く、夜も更けてしまったので、（男は）鬼がいる所とも知らないで、（その上）雷までたいへんひどく鳴り、雨も激しく降ったので、荒れ果てた蔵に、女を奥に無理矢理入れて、男は、弓・胡籙を背負って（警戒して）戸口に座る。「早く夜も明けてほしい」と思いながら座っていたところ、鬼が（女を）たちまち一口で食べてしまった。「あれえ。」と（女は）言ったけれど、雷が鳴るやかましさに（男は女の悲鳴を）聞くことができなかった。だんだん夜も明けていくので、（蔵の中を）見ると連れてきた女もいない。（男は）じだんだを踏んで泣くけれども、どうしようもない。

（あの光るものは）真珠かしら、何かしら、とあの人が（私に）尋ねた時、あれは露ですよ、と答えて（そのまま露のように）消えてしまえばよかったのになぁ。（そうすればこんなに悲しい思いをしないですんだのに。）

　この話は、二条の后が、いとこの女御の御そばに、お仕えするようなかたちで（身を寄せて）いらっしゃったが、容姿がたいそうすばらしくていらっしゃったので、（男が）盗んで背負って出ていったが、（后の）御兄上の堀河の大臣、ご長男の国経の大納言がまだ官位の低い者であって宮中へ参内なさる時に、ひどく泣く人がいるのを聞きつけて、（男を）制止して（后を）取り返しなさったのだった。それをこのように鬼と言ったのであった。

　（后が）まだたいへん若くて后が普通の身分でいらっしゃった時のことだったとかいうことだ。